復活節第二主日（Ａ年）のみことばの典礼の解説

典礼的背景

１．「神のいつくしみの主日」…教皇ヨハネ･パウロ二世が 2000 年に復活節第二主日を神のいつくしみの主日として制定。信者が聖霊の慰めの賜物を豊かに受け、神への愛と隣人への愛を強め成長させることが出来るように、この日に神のいつくしみに対する特別の信心を行うよう望んだ。信者はそれぞれ自分を反省し、罪のゆるしを得た後、兄弟姉妹をすぐに赦すよう促されている。

２．「白衣の主日」…教会の伝統の中で、復活徹夜祭で洗礼を受けた新しい信者はこの日まで白衣を着ており、この日に脱いだことから、復活節第二主日は「白衣の主日」と呼ばれた。実際、復活の八日間(復活の主日～第二主日)の典礼では、新しく洗礼を受けた者たちのために祈ってきた。

第一朗読　使徒言行録　2 章 42～47 節

02:42 彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。02:43 すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。02:44 信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、02:45 財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。02:46 そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、02:47 神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

【解説】始まったばかりの教会共同体の姿が描かれている。これは原始教会の描写であるから教会とは何かについての考察のため必須の箇所である。使徒言行録には、原始教会(特に共同体の在り方)についての箇所が数か所あるが、代表的なところと言えば本日の第一朗読の箇所と 4 章 32～36 節である。いつの時代のキリスト者も、これらの箇所をよく読んで教会とはそもそもどのような共同体なのか絶えず考え直さなければならないであろう。以下に考察のポイントとなる項目を挙げる。

- ◆ **初代教会の信者の土台となっているもの**(42 節)：①使徒の教え、②相互の交わり、③パンを割くこと(ミサ)、④祈ること、⑤それらへの情熱…五項目と考えるならば、真ん中にあるのはミサ聖祭である。
- ◆ **初代教会の信者の行動**(44-46 節)：①一つであること、②持ち物の共有、分け合い、③心を一つにして神殿に行く(祈る)、④家ごとに集まってパンを割く(家庭(集会)ミサ？)、⑤喜びと真心を持って食事、⑥神への賛美。
- ◆ **一致していること！**：使徒言行録の特に前半部分には、しつこいくらい“一つであること”、“一致していること”、“心を合わせて祈り行動すること”、“一緒にいること(特に礼拝と食事において)”などの表現が出てくる。使徒言行録の著者とされるルカが、初代教会の最大の特徴として強調したかったのは間違いなく「一致」である。すべてのキリスト者が物的、精神的、そして霊的に一つであること。どの時代の教会も、どの共同体もこれを特徴としていなければならない。
- ◆ **宣教の概念の再考察のために…**使徒言行録は、上述の初代教会の生き方や特徴の結果、「(キリスト者は)民衆全体から好意を寄せられ…」信じる人々が増えて行ったと書いている。神のことを宣べ伝えるためにすべきことは何かについて、とても考えさせられる文である。

第二朗読　ペトロの手紙Ⅰ　1 章 3～9 節

01:03 わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、01:04 また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。01:05 あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。01:06 それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、01:07 あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。01:08 あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。01:09 それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

【解説】A 年の復活節中の主日の第二朗読はペトロの手紙Ⅰから読まれ、これから五週続けて読まれる。この手紙は回心して洗礼を受けた人たちに語られた説教がもとになっていると言われ、受洗者のためだけではなく、洗礼を受けた人たちを迎え入れる共同体の在り方としても参考になる。賛美で始まる 3 節と 4 節は、エフェソ書の 2 章 4 節以下に共通するものがあり、洗礼の響きが顕著であるため、一部の学者によると初代教会の洗礼式の式文、または賛美歌であったともいわれる。洗礼に基づく希望は、終末(世の終わり)におけるキリストの再臨に向かっている。この時すべては完成し、自分たちが救われるという希望は、今すでに、この世においても洗礼をとおして与えられている。最後に完成される救いに向かって、洗礼をとおして与えられる恵みに信頼しながら、今という試練の時を生き抜くようにと著者は励ましている。

福音　ヨハネによる福音書　20 章 19～31 節

20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20:20 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。20:21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」20:22 そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。20:23 だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」20:24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。20:25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」20:26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。20:27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」20:28 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。20:29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」20:30 このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。20:31 これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

【解説】復活節第二主日の福音はA年、B年、C年に共通で、いつも、ヨハネ20章19〜31節である。

１．背景：復活したイエスが初めて弟子たちに表れる場面。二回に分けられている(①トマス不在時：19〜23節＋②トマス在時：24〜29節)。これに“ヨハネ福音書の目的(30-31節)が付随している。ヨハネ福音書の“復活の章(20-21章)”の枠組みの中では、①空の墓の場面(20:1-9；マグダラのマリアとペトロと愛する弟子が墓に駆けつける)、②マグダラのマリアとイエスの出会いの場面(20:11-18)に続く場面である。

２．注釈と解釈のポイント(一回目の出現19-23節)

その日、すなわち週の初めの日、(19節)：日曜日のこと。ユダヤ教の安息日は土曜日に当たり、その次の日、つまり日曜日。イエスは(ユダヤ教の)週の初めの日に復活なさったので、キリスト者にとってはユダヤ教の安息日(土曜日)から復活の日曜日へ祭儀的重要性は移行されていった。

弟子たちはユダヤ人を恐れて、…(19節)：師であるイエスが殺されたので、当然自分たちの命も危ないという恐れ。一部のユニークな解釈によると、師イエスへの恐れでもあるという。十字架のイエスを置き去りにして皆逃げてしまったため(共観福音書では全員逃げ、ヨハネ福音書では愛する弟子のみが留まった)。生前イエスの奇跡を目の当たりにしていた弟子たちは、誰よりもイエスの神としての力を知っており、それによって裏切りが裁かれ、自分たちが滅ぼされるのではないかという恐れ。

自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた(19節)：恐れの種類が何であるにしても、“鍵のかけられた家”は恐れと不安でがちがちになった人の心をも象徴すると言われる。確かに、人は恐れと不安を感じると、心は閉ざされ、自己保全、保身ばかり考えるようになる。人はそれでは生きていけない。むしろそこから解放される(＝不安という枷を打ち砕く)必要がある。

イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた(19節)：だから**イエスが自らそこへ入ってきて、真ん中に立って、平和を宣言された**ことに深い意味と重要性があるのである。復活したイエスは、人々の不安と恐れを取り払う。それは“平和の宣言”による。断罪、刑罰などを通してではなく、平和をとおして勝利するのがキリストの復活である。**「あなたがたに平和があるように」**は今日の朗読箇所で3回(19,21,26節)も出てくることに注意。当然、重要性がある。イエスの復活とは、恐れと不安に対する**絶対的な平和の勝利の宣言**である。

手とわき腹とをお見せになった(20節)：少なくない人がこのイエスの行為を謎に思う。トマスに見せるならわかるが、そもそもそのトマスもまだ登場しておらず、「傷ある手とわき腹を見て、それに触れなければ信じない」とトマスが言うのはこの後である。つまり、このエピソードと関係ないところで、イエスはいきなり傷の部分を見せた。面白い解釈かもしれないが「痛みこそが最も力強い愛のしるしであるから」と解する人がいる。つまり、十字架は救いの手段ではあったが、それは神の愛が最も強く啓示された場所、瞬間でもあったわけで、イエスは実際、傷を見せることで「これだけ私はあなた方を愛したのだ」と言い、その愛の証拠を見せたという解釈。実際、最後の食事の席が始まる13章1節に「…イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」とあるが、復活したイエスはその証拠を見せるのである。実際、人を納得させるのは痛みを伴う愛である。その人のためにどれだけ自分の時間、労力

を割いたか、そして命を差し出したかということ。これは私たちの実生活においてもよくわかることではないだろうか。

「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」(21 節):復活したイエスは弟子たちを派遣する。イエスの言う通り、それは父が子(イエス)を派遣したのと同じように、である。イエスと父なる神との一体性(一致)は、イエスと弟子たちの一致に繋がっていく。ヨハネ福音書の“救い”の概念は、イエスが持っている父なる神との一致のうちに吸収されていくようなイメージである。だから、イエスと弟子たちとの一致のみならず、それはイエスとキリスト者(教会)の一致でもあり、イエスとイエスを信じる人たち、救われるすべての人たちとの一致でもある。派遣についても同様に、父なる神と子であるイエスの関係が前提になっている。私たちは、イエスが父から遣わされたように派遣されるので、イエスが言ったこと、行ったことを徹底的に学び、それを実践して言うことが求められている。

そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい…」(22 節):聖書において「息を吹きかけて」と言う表現は、何よりもまず、創世記 2 章 7 節「主なる神は、土の塵(アダマ)で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」を想像させる。ヨハネは当然これを土台に持っているので、復活したイエスが第二の創造、新しい創造をしたのだ、と言っているのである。そして、それは聖霊降臨の概念と重ねられている。つまり、イエスの復活は新しい創造をもたらすものであり、それは聖霊によって行われるということ、しかもその聖霊は、復活したイエスがもたらす霊であるということ。ここにはいくつかの重要概念の重複があるが、これもヨハネ福音書の特徴である。対照的に、歴史的出来事を中心にクロノロジカルに救いの出来事を書きたいルカは「〇〇王、〇〇皇帝の統治〇〇年に、〇〇という場所で…」と言う表現を多用する。これは救いの出来事を歴史の時間の中にしっかりと埋め込んで読者に提示したいからである。ヨハネの視点は全く違って、歴史的事実を時間の流れの中で語るよりも、キリストの秘儀を神学的に重ねて描こうとするのが特徴である。

だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。(23 節):弟子たちへの一回目の(トマス不在)の出現の最後に“罪のゆるし”のことが出てくる。19〜23 節のイエスの言葉を単に文学的、または小説的に読むと、理論的につながっておらず、ちぐはぐな感じがする。しかし、ヨハネの神学的視点の中では、重要なメッセージが込められてる非常に素晴らしく美しい構成になっている。このイエスの復活のエピソードを読んでいるヨハネ福音書の対象者たちは、紀元後 100 年ごろの初期キリスト教会の信徒たちで、彼らにとってもゆるしが非常に大事なテーマであった。それは第一朗読の使徒言行録が“一つになること”を重要視していたこと、または他の新約聖書の諸書の主題から見ても明らかである。そしてそれは今の教会、私たちの共同体においても同じである。ヨハネ的な視点は、復活したイエスが言っている“罪のゆるし合いの重要性”であるが、それは、聖霊を受けて、つまり、聖霊の力によらなければなされないこと、もっと言えば、聖霊によって新たに創造されなければなしえないことなのである。さらに言うと、イエスが最初に言った“平和”とも深く関係している。つまり、ゆるし合いのメッセージに至るまで、順番にイエスの言動を追っていくと「平和」の宣言があり、「派遣」があり、「新しい創造」と「聖霊の授与」が行われているのであるが、これらはすべて、「互いに罪をゆるしあえ」と言うイエスの最後のメッセージに帰結していくのである。実生活から考えてみてもよくわ

かる。人の悪や罪をゆるすのは人間業ではできない。神の力と恵み(聖霊の働き)が必要である。その聖霊によって新たにされなければならない。そして、何より、私たちの中に平和がなければ、ゆるすどころか、聖霊を受け取ることもできないかもしれない。そう考えると、復活節第二主日から、聖霊の働きのことを明確に打ち出す福音書をとおして、典礼は、復活節最後の重要な祭日である聖霊降臨祭に向けて、ますます私たちを駆り立てていることがわかる。
最後の食事の席で、イエスが最初にしたことは“弟子たちの足を洗う”という行為(13 章参照)だった。この、当時、奴隷が主人にしていた行為をイエスは自ら行ったのであるが、これは、“相手の一番汚い部分をきれいにする”という行為でもあった。つまり、ここでの汚れは相手の弱さ、闇、汚れ、罪ととれるのであるが、そこに自分が降って行って、きれいにするのだから、当然、ゆるすことと密接に結びついているわけである。「復活節中の主日の福音の概要」で説明したが、このように、受難/復活の前と後のイエスの行為は深く関係していて、基本的に受難/復活後のイエスの教え、言葉、行いが、受難/復活前のそれらの完成形になっているというパターンがある。ここでも「弟子たちの足を洗う」という模範は「罪をゆるしあいなさい」という最終メッセージに直結している。

まとめ(一回目の出現 19-23 節)：この箇所に描かれるヨハネの復活思想は以下のようになる。イエスの復活はまず、①平和の勝利の宣言であり、②弟子たちは復活したイエスから遣わされている(復活＝派遣の根源)。それは、③新しい創造(息を吹きかけて)でもあり、同時に④聖霊降臨でもある(復活したイエスこそが聖霊を与えるという捉え方)。何よりその目的は⑤「罪のゆるし合い」なのである。私たちはますます聖霊の力を願わなければならない。

３．解釈のポイント(二回目の出現 24-29 節)：
非常に有名なトマスの言葉、そして、イエスとトマスのやり取りが描かれる場面である。多くの人が知っているエピソードなので、端的に論点をまとめる。まずトマスの不信仰の問題があらわになっている。これはほとんどの現代のキリスト者が無意識的に、または意識的に抱えている経験主義、科学至上主義、合理主義などの問題に通ずるので、よく考えてみるとよい。人間の知性と理性を通して得られることに絶対的な信頼や思考の土台を置く考え方に対する、聖書的信仰の本質を提示しているような箇所であるから、その意味ではとてもよい黙想ができるのである。人間にとって、見たり触ったりという自分の経験とそれを理解するための知性と理性が一番大切か。それらだけによって生きているのか、それらしか信頼に値するものは存在しないのか。このような質問から初めて、信じるとは何か、信じることの意味や意義はあるのか、もしあるならその必要性と重要性はどのような部分にあるのかなどを考え、最後に、信じることによる喜びと幸いについてまで考察を続けなければならない。イエスは何より「わたしを見たから信じたのか。**見ないのに信じる人は幸い**である」と言われたのだから…。ただ、このプロセスは少々哲学的にもなるし、紙面の都合もあるので割愛するが、“聖書的な信仰の概念”については触れておきたい。聖書に出てくる「信じる(名詞だったら信仰)」の第一のニュアンスは“信頼”である。わかりやすく言えば、裸一貫、病気か何かで身動き一つできなくなった時、それでも自分をゆだねきれる相手がいるならば、その方を“信じている（信頼している)”と、聖書的には言える。「宇宙人がいると信じる」、「明日は雨だと信じる」などの表現は、日本語では正しいとして使われるが、信頼とは全く関係がないそれらは、聖書が言うとこ

ろの“信じる”ではない。知性や理性をとおして判断した結果、自分の考察が行き着いたところのものを「信じるもの」とは聖書は呼ばず、そのためには別の動詞が使われる。

４．ヨハネ福音書が書かれた目的：「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである(20:31)」：ここにはヨハネ福音書が書かれた目的がある。 それは、信じるようになること、そして信じて命を受けるためであるとヨハネは言う。実際、ヨハネ福音書の主題、メッセージはすべて“信じるようになること”と密接に結びついていた。前半部分では特に、「よく見なさい」、「よく聞きなさい」＋「信じなさい」のように、五感を通して得られる知識や経験を研ぎ澄ますことで信仰に至れと読者を叱咤激励してきたのがここまでのヨハネ福音書である。しかし、復活したイエスは、大きく飛躍して最後のメッセージをトマスに与えた。「見ないで信じる者は幸い」である。「信じるためによく見なさい、よく聞きなさい」、から、「見なくても聞かなくても信じなさい」になったのが大きな飛躍でもあるが、さらに注目すべきは「見なくても聞かなくても信じよ」ではなく「見なくても聞かなくても信じる人は幸せだ」とイエスが言ったところにある。上述した、信じることの意義、意味、必要性、重要性は何かという問いはもちろん無駄ではないし、大いに考察に値するのだが、経験主義、科学至上主義、合理主義に染まりきっている私たちは、自分が信じることの喜びや、自分が信じる(信頼する)方がいてくださることのすばらしさ、またその方への感謝といった肯定的観点から、もっと霊的に、つまり頭と言うよりも、心や魂の部分で、信じることの幸せを追求すべきなのではないだろうか。聖書的な説明と解釈から少し離れるが、今の新型コロナウイルスはある意味で、人間のもろさ、弱さ、はかなさ、限界を露呈している。どんなに科学技術や医療が進んだところで、人間の現実に病気なしの不老不死はあり得ない。つまり、経験と知性だけでは、人間は本当に“幸いな者”になれない。現在、このような時だからこそ、自分が信じること、また他者から信じてもらえること、そして、そのような方がいてくださることの幸せを追求し、それを生きていかなければならないのではないか。